

## 第4回茨城県スポーツ推進審議会議事要旨

1 日 時 令和7年11月21日（金） 10時00分～11時30分

2 場 所 茨城県開発公社ビル4階 小会議室

### 3 出席者

（委員8名）荒井委員、麻見委員、金谷委員、染谷委員、橘委員、富山委員、横山委員  
渡邊委員

※下線の委員はリモートでの参加

（事務局4名）

保健体育課：柳副参事、田城課長補佐、相田指導主事、中條指導主事

### 4 議 事

#### （1）報告

①第79回国民スポーツ大会の結果について

②高校生の全国大会結果について

#### （2）審議

①ジュニアアスリート発掘・育成事業について

②トップアスリート育成事業について

③指導者の確保・活用について

### 5 議事概要

#### （1）報告

①第79回国民スポーツ大会の結果について

（委員長）報告に入る。第79回国民スポーツ大会の結果について、事務局より報告願う。

（事務局）第79回国民スポーツ大会の結果について、事務局より報告。

（委員長）事務局からの報告に対して、質問等はあるか。

②高校生の全国大会結果について

（委員長）次に、高校生の全国大会結果について、事務局より報告願う。

（事務局）高校生の全国大会結果について、事務局より報告。

（委員長）事務局からの報告について、質問等はあるか。

（委員）高体連では、インターハイの成績を国民スポーツ大会の得点に換算してデータを出している。参考までに、今年は男子が26位、女子も26位、総合で27位という順位だった。

（委員長）本県で例年入賞しているような競技もあるが、新たに入賞数を増やしてきている競技などはあるか。

（事務局）近年の結果を見るとヨットや水泳が毎年のように優勝者を輩出している。また、ウェイトリフティングや陸上競技も入賞者がコンスタントに出ている。

（委員）新たに入賞者を増やしている競技としては、少林寺拳法やアーチェリーが力をつけてきている。

(委員) 本県だけでなく全国的にも私立高校が活躍している傾向があるが、今後、県が私立高校をサポートするような計画はあるか。

(事務局) 今のところ私立高校を学校単位で直接的に支援するような計画はない。県としては、県スポーツ協会を通して各競技団体へ補助をしている。競技団体内で国民スポーツ大会に向けた強化の取組の中で、学校単位で強化費をつけている競技もある。県から間接的に支援をしている現状である。

## (2) 審議

### ①ジュニアアスリート発掘・育成事業について

(委員長) では、審議に移る。初めにジュニアアスリート発掘育成事業について、ジュニアアスリート育成選手第5期生の選考状況を事務局より説明願う。

(事務局) ジュニアアスリート育成選手第5期生の選考状況について、事務局より説明。

(委員長) 事務局より説明のあったジュニアアスリート育成選手第5期生の選考について、意見を伺う。  
申込者の運動経験に関するデータは魅力的だと感じる。運動経験のない児童もチャレンジしており、事業としても新たな人材を発掘するという面で価値がある。

(事務局) 運動経験がなくても1次選考を通過している児童もいる。12月の2次選考では、過去に運動経験がなくても、運動能力が高い子は選ばれる。

(委員) 空手では、小学生のときは複数の習い事をしている子どもが多く、意外と1つに専念しているよりも長期的に活躍する選手になることが多いと感じている。球技をやっていた子どもに関しては距離感の調整能力が高く、対人競技だと相手の出方を予想して先に動く能力があるので、リタイアしたときに別の競技でトップを目指したり、スポーツ自体を楽しんだりする意味でも複数の競技に取り組むことは良いと考える。

(委員) ジュニアの選手を育成していくときに、選手がピークを迎えたときにどのような能力を身に付けておくべきかを考えてプログラムを構成していく必要があるが、競技によってもピークの年齢に違いがあるので、そういった視点をもっていくことが大事だと考える。

(委員) 小学4年生はこれから思春期を迎えて体が成長していくので、競技の選択が早期になってしまうと、いろいろな可能性も狭まってしまうがちなのではないかと心配になる。また、食事と睡眠を併せて十分に指導していかないと、スキルは高くても体が小さいことで世界と戦えないこともあるので大事にしてほしい。

(委員長) 次に選考後に選手が取り組む育成プログラムについて、前回の委員からの意見も含め、今後の方向性を事務局より説明願う。

(事務局) ジュニアアスリート育成プログラムについて、事務局より説明。

(委員長) 前回の委員からの意見を反映していただいたが、改めて意見を伺う。

(委員) 系統立てて継続的に進めていくということが、難しい課題と考えている。食

育では担当する人が変わるだけで伝わり方が変わってしまうこともあるので、栄養士会と連携するなど、工夫できると良い。また、学校の栄養教諭を巻き込む仕組みを作っても良いと考える。

(委員) 過去の育成選手がその後、どのくらいの競技パフォーマンスを発揮しているかという追跡調査はしているか。

(事務局) 追跡調査については、現在中学3年生の第1期生から中学1年生の第3期生まで行っており、新たに中学校から始めた競技で全国大会に出場している選手もいる。

(委員) 小学生の時点で可能性を判断することは難しいと考える。早熟であったり、生まれ月に偏ったりする傾向もある。表現や技術要素が高いスポーツでは、早い段階から高い競技パフォーマンスを発揮する調査の結果などもあるので、種目を絞っていくことも1つの方策なのではないかと考える。

(事務局) これまでは育成の期間が小学6年生までだったが、今回の第5期生からは中学3年まで育成していく。委員ご指摘のとおり早熟の選手もいると思うので、中学1年生の段階で若干名を追加するような選考会も考えている。

(委員) 海外の調査では、若い段階から発掘して最終的に国の代表レベルになる確率は1%以下というくらい、なかなか見つけるのは難しい。

(委員長) 100%の子どもたちを世界で活躍させることは難しいが、こういったプログラムで育成した選手たちが次は指導者として活動したり、スポーツとは違う分野で活躍したりすることもある。そういった副次的な効果も期待できる。

## ② トップアスリート育成事業について

(委員長) では次に、トップアスリート育成事業について、事務局より説明願う。

(事務局) トップアスリート育成事業について、事務局より説明。

(委員長) 事務局より提案のあった選考基準の設定等について、意見を伺う。

(委員) すばらしい事業と感じる。高校は学校ごとにいろいろな繋がりがあるので、その繋がりを含めた上で、例えば全国大会でベスト8以上のチームを招聘するなど、特化した学校やチームのような条件をいれても良いのではないかと考える。

(委員) プロスポーツチームのユースチームとの連携は県として行っているか。

(事務局) 競技団体内で実践している競技もある。

(委員) 鹿島アントラーズのユースチームが全国大会で優勝しており、そこからシニアのチームに入って日本代表になるという選手も多く出ている。連携するのも得策なのではないかと考える。

(事務局) これまでバスケットボールとサッカーの2競技でトップアスリート育成モデル事業に取り組んできた。サッカーでは大学生年代ではあるが、関東選抜や東北選抜、U22の日本代表を招聘して茨城県選抜のチームと大会を行っている。過去には海外チームも参加した。本県の選手がハイレベルのチームと対戦して競技力の向上を図ろうと実践している。

### ③指導者の確保・活用について

(委員長) では次に、指導者の確保等について、事務局より説明願う。

(事務局) 指導者の確保・活用について、事務局より説明。

(委員長) 事務局から説明のあった指導者の確保・活用に対する取組について、意見を伺う。

(委員) 競技によっては、道具やルールが変わると指導方法や戦術が変わっていく。指導者が昔の感覚で指導していてうまくいっていないケースも聞く。指導者の研修というと栄養面や医学面のようにトータル的な内容になってくるが、一方的なレクチャーではなく、現場の方々が情報交換したりコミュニケーションを図ったりする時間を設けていくと、参加する方も受けやすいのではないか。

(委員) パラスポーツでは選手の発掘も課題だが、それ以上に指導者不足が大きな課題になっている。東京オリパラを契機にパラスポーツの認知度も上がって、スポーツを始めたいという障害のある方が増えてきた。そのような中で、受け皿がないので、どんどん水がこぼれていっているような感覚がある。いきなり指導者資格を求めることはハードルが高いと感じる方も多いため、資格制度にいく前に勉強会から始めてみようという横の繋がりに取り組んでいる。最近AIを活用した分析などは若い人の方が秀でているので、年齢や経験にこだわらずに情報交換ができる場を作ることが大事だと考える。また、困ったときに相談したり自分の弱音を見せたりしづらいようなところも、競技を越えてのコミュニティーがあると心強く思えるのではないか。

(委員長) 審議事項については以上だが、全体のことで意見や質問はあるか。

※意見・質問なし

(委員長) では、以上で議事を終わる。